

ミセスワタナベが無視できない

2013年7月16日(月)

第一生命経済研究所 経済調査部

藤代 宏一

TEL 03-5221-4523

16:29 現在

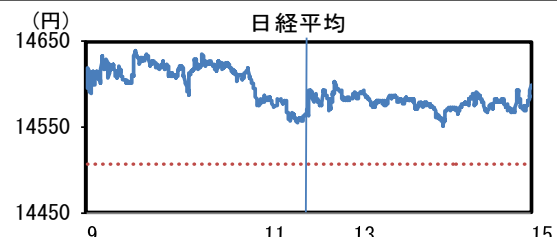
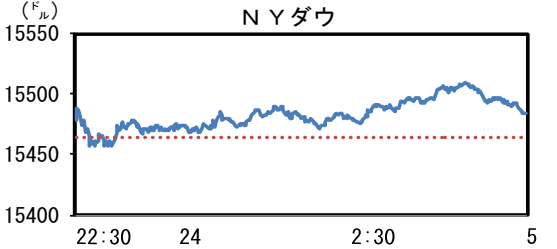
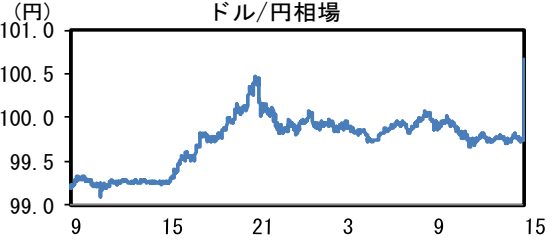
<主要株価指数>		
	終値	前日比
日経平均株価	14599.12 円	92.87 円
TOPIX	1210.54 pt	8.55 pt
NYダウ	15,484.26 ^{ドル}	19.96 ^{ドル}
DAX (独)	8,234.81 pt	22.04 pt
FTSE100 (英)	6,586.11 pt	41.17 pt
CAC40 (仏)	3,878.58 pt	23.49 pt
上海総合※	2,065.72 pt	6.33 pt

<外国為替>※		
ドル円	99.85 円	0.00 円
ユーロ円	130.7 円	0.27 円
ドルユーロ	1.3089 ^{ドル}	0.003 ^{ドル}

<長期金利>※		
日本	0.825 %	0.010 %
米国	2.537 %	▲ 0.045 %
英国	2.342 %	0.014 %
ドイツ	1.578 %	0.018 %
フランス	2.211 %	0.018 %
イタリア	4.468 %	▲ 0.015 %
スペイン	4.730 %	▲ 0.050 %
オーストラリア	3.750 %	0.007 %

<商品>		
NY原油	106.32 ^{ドル}	0.37 ^{ドル}
NY金	1283.50 ^{ドル}	5.90 ^{ドル}

※は右上記載時刻における直近値。図中の点線は前日終値。
(出所) Bloomberg

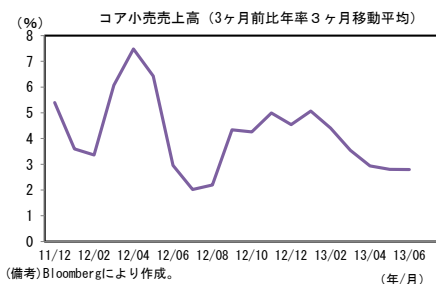




【海外株式市場】 ～消費はモメンタム鈍化も企業マインドは持ち直しへ～

15日の米国株式市場、NYダウ平均株価は続伸。前日比+19.96^{ドル}の15484.26^{ドル}で取引を終了。米経済指標はまちな内容だったが、予想を上回る企業決算が好感され買い優勢の展開となった。なお、S&P500は8日続伸。

6月小売売上高は前月比+0.4%と市場予想(同+0.8%)を下回った。除く自動車でも同+0.0%と増勢が鈍化している(市場予想:同+0.4%)。基調を表すコア小売売上高は同+0.1%と前月(同+0.2%)から減速。3ヶ月前比年率で見ると+2.8%まで鈍化しており、消費の拡大モメンタムが弱まっていると判断せざるを得ない(図)。

7月NY連銀製造業景況指数は+9.46と市場予想(+5.00)を上回り前月(+7.84)から改善。内訳をみても新規受注がプラス圏へ浮上(▲6.69→+3.77)したほか、雇用も改善(0.0→3.26)しており内容が良い。



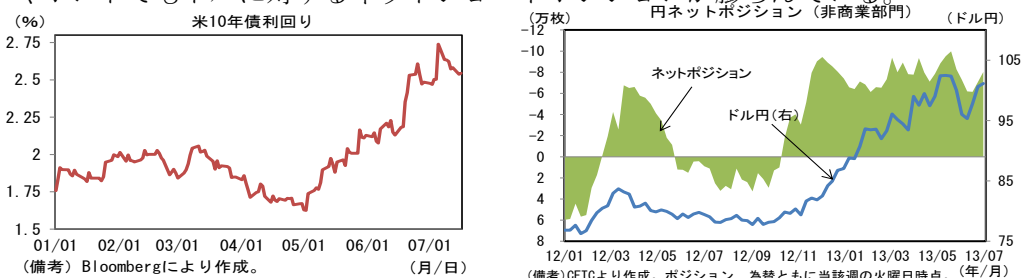
本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

【外国為替相場・債券市場】 ～円ネットショートポジションが増加～

15-16日の海外市場では、ドルがユーロや円に対して買われた。QE縮小観測がメインテーマとなるなか、特段の材料もなくドル高主導で円が下落。米小売売上高が市場予想を下回ったことを手掛かりに円が買い戻される場面もあったが、100円付近ではドルの押し目買い意欲が強く、「行って来い」の展開にはならず。

米10年債利回りは5bp低下の2.54%（図）。FRB高官の言うところの「過剰反応」は解消の方向に向かっている。円債市場にとってみれば、QQEの効果を存分に享受できる環境が整ったと言える。

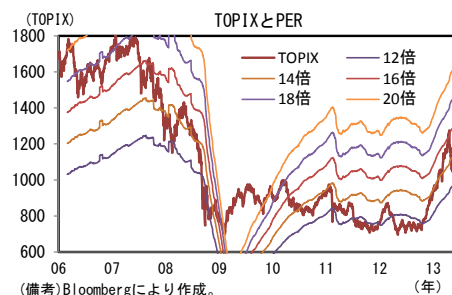
CFTCデータ（7/9時点）によると円のネットショートポジションは8.0万枚と前週（7.1万枚）から増加。その他、ユーロやポンドでもドルに対するネットショートポジションが膨らんでいる。



【国内マーケット】 ～バリュエーションは依然として魅力的～

16日の東京株式市場、日経平均株価は続伸。前日比+92.87円の14599.12円で取引を終了。前週末からの米株高と円安が好感され買いが膨らんだ。

TOPIXのPERは14倍台後半まで切り上がっているが、過去の業績拡大局面と比較すれば、依然として魅力的なバリュエーションと判断される。今月末から本格化する決算発表で業績の上方修正が確認できれば、業績の更なる拡大期待からPERの切り上がりも期待できよう。

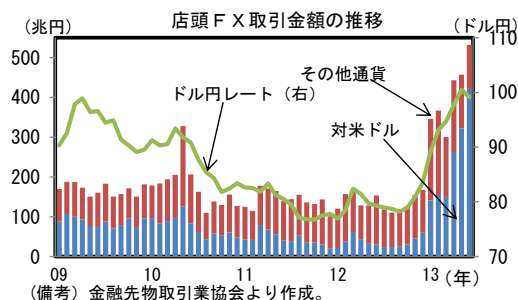


【注目点】 ～ミセスワタナベが無視できない～

円安要因として一般に認識されているのは、①日米金融政策のベクトル相違、②日本の貿易赤字、③本邦企業による海外M&A（IN→OUT）④本邦金融機関の外債投資観測（いわゆるポートフォリオ・リバランス）などである。しかし、ミセスワタナベと称される本邦個人投資家の行動が話題にされることはあまり無い。だが、もはやミセスワタナベの取引金額は無視できるレベルでは無い。

金融先物取引業協会が12日に発表した「店頭FX取引概況」によると、6月の全通貨ペアの円建て取引金額は前月（457兆円）から16%増加して532兆円（うち対ドル422兆円）となり、3ヶ月連続で過去最高を更新した。これは、たった1ヶ月間で個人金融資産（約1500兆円）の約1/3あるいは名目GDPを凌駕する金額が取引されたという驚異的な数値である。ここまでの規模の為替取引が行われたのであれば、為替に相当な影響を与えたと考えるのが自然ではないだろうか。

6月のドル円は100円近傍で始まり、月中には一時94円台まで円高が進行したが、月末には99円台まで戻した。逆張り志向の強いとされる個人投資家にとってみれば、振れを伴った円高は絶好の収益機会であり、円高局面でミセスワタナベによる大規模な「民間版為替介入」が巻き起こったものと推測される。6月末時点の円キャリー額は「ほぼ100円回復」の達成感などから減少（3.0兆円→1.8兆円）したが、今後、円高局面が再来した際は再び円売りで参戦すると思われる。



【予想レンジ（5営業日内）】

NYダウ平均株価 15200～15800^{ドル} 日経平均株価 14000～14950円 ドル円 98.00～101.50円

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。